



第1回 置賜地区いじめ・不登校防止連絡協議会

～語り、語らせ、語り合わせる キャリア・カウンセリング～

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 長田 徹 先生

今年度、第1回置賜地区いじめ・不登校防止連絡協議会を米沢市アクティー米沢を会場に実施いたしました。昨年度に引き続き、文部科学省初等中等教育局教育課程課 長田徹 教科調査官をお招きし、「いじめの未然防止に向けた、キャリア・パスポートの活用とキャリア・カウンセリングについて」ご講演をいただきました。

昨年度は学習指導要領のもとでのキャリア教育の在り方について理解を深め、「キャリア・パスポート」の意義と活用例について学ばせていただきました。今回は、さらに「キャリア・パスポート」を活用した「キャリア・カウンセリング」の意義や方法等について学びを深め、発達支持的生徒指導の理解を深めることをねらいとして実施しました。

講義では、「カウンセリングとは専門家にゆだねることや、面接に限ったものではなく、教師が意図を持ち、日常的に児童生徒と行う『対話』や『言葉がけ』を含めた広義なものであること。」「生徒からの相談に対し、安易に『大丈夫』とは言わずに、本人の意思（気持ち）に耳を傾けること」の大切さを教えていただきました。「普段の生活の中で教師と生徒の間に生じる“コミュニケーションのズレ”をなくすには、傾聴すること」が最も重要であるという事を、演習を通して実感された先生方が多くいらっしゃいました。

ぜひ研修会に参加いただいた先生から校内に広めていただき、先生方の実践につなげていただければと思います。キャリア・パスポートを活用したキャリアカウンセリングの充実のために、下記の資料もご利用ください。

実践事例 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/tokkatsu_j-h_leafb_1.pdf

『中学校・高等学校特別活動指導資料 学校文化を創る特別活動』



*ご参加いただいた先生方の感想から



「キャリア・パスポート」は、“轍づくり”という言葉が、とてもストレートに入ってきました。今まで、自分の中で活用の仕方が今一つ分からなかったのも、とても参考になりました。教室の隅でずっと眠っている存在だったので「何か活用できないかな。」と思っていました。しかし、行事や節目などで自分が頑張ってきたことや目指すものを蓄積していくものであり、大人になったとき過去を振り返ることができるような財産にしてあげたいと思いました。悩みを打ち明けてくれる子どもに対しての言葉がけについて、「どんな言葉がいいのか。」を考えるきっかけになり、明日からの学校生活で生かしていきたいと思いました。（小学校教諭）

講義・演習を通して、教師から「どんな言葉をかけると子どもは納得するか。」というワードを考えていましたが、それ以上に子どもがどんなことを考えているのかを傾聴し、対話することが大切なのだと感じました。1ターンだけのキャッチボールではなく、お互いを分かり合えるようなキャッチボールを何ターンも行うような関わりをしていきたいと思いました。また、キャリア・パスポートについても、子どもを理解するツールである、そして何よりも子ども自身が、自分自身のためにファイリングしていくものであることを確認できました。「おきたまの教育」に描かれている風船のイメージがキャリア・パスポートと重なりました。（中学校教諭）



自己決定の場について、知っているつもりながらも、教師主導で動いていることが多いように感じています。今日のお話をお聞きして、改めて自己決定の機会を設定することが大切だと感じました。また、“将来への轍”という言葉から、見通しと振り返りを想像しました。授業で大切にしていることが生かされるようなキャリア教育を行っていきたくと思いました。子どもの話を聞くこと、ご家庭の人とつながることを大切にしていきたいです。また、教師の見立てと子どもの感じ方が異なっていることが問題を複雑化しているケースが多いと感じています。（中学校教諭）

特別支援教育研修会

「置賜特別支援教育研修会」では、大阪市立大空小学校初代校長 木村泰子氏より、オンラインにて、「その子がその子らしく育つために」～みんなで考える“特別”支援教育～と題し、ご講義いただきました。学校以外の教育関係の方々や、校内研修として全職員で参加する等、多くの方々に参加いただき、大変ありがとうございました。この研修会では、「特別支援教育」を改めて問い直すきっかけにしたいとの思いから、感想の交流の時間を多く設けました。課題や疑問に感じたことを話し合い、願いや理想を語り合える有意義な研修会となったと思います。今後も、インクルーシブ教育システムの構築への理解を深め、誰一人取り残さない教育の実現に向けて、すすんでいきましょう。

～～ 木村泰子先生のお話より ～～

- 子どもの事実から「特別支援教育」の問い直しを。
- 合理的配慮は、みんなと一緒に学び合うことができるための手段。
- 「自立」から「自律」へ（自律…自分で考え、判断し、決定する力）
→ 互いが適切に依存し合うことが大事。
- 何度も失敗して、やり直せる環境が大切。そして、成功体験を。
- 職員室は、すべての人の安全基地。弱みそのまま出せる職員室へ。
- 教師の役割は、子どもと子どもをつなぐこと。
- 大人も子どもも学校をつくる当事者。保護者や地域も、学校のサポーターに。



<参加者の方々の感想を一部紹介いたします。>

大空小学校では「ふつう」を捨てたというのが印象に残りました。通常学級と特別支援学級と分けるのではなく、260人で260通りの学びをするというのは今の日本の特別支援教育の課題を乗り越える大切な視点だと思います。そして一緒に学ぶ中で、困っている子を支援するのではなく、「今困っている子はだれ?」、「その子が困らないようにするにはどうしたら良い?」と周りの子を変える声掛けをするというのは、これからの子どもたちとのかかわり方について考えるきっかけとなりました。私もそのようなことを意識しながら指導したいと思います。

特別支援教育とは何かという根幹を改めて考えました。こどもとこどもをつなぐ特別支援教育、障がいのある子だけでなく、周りの子を育てる環境作り、全職員でのチーム支援など大切なことばかりだと思いました。全職員で本日の研修内容を共有したいと思います。

お話をお聞きすることができてよかったです。自律する力とは、自分で考え、判断し、決定し、行動すること。これは、正にわたしが子ども達につけたい力です。その力をつけるために、これまで、いろいろ試行錯誤して指導、支援をしてきましたが、子ども達が自分の意思で行動し、失敗したらやり直し、やり直して成功体験をつんでいくことが大切であることがわかりました。

自分のカチコチの価値観を、いい意味で壊されたような気持ちです。子どもを変えようとする前に、まず大人から、だと思えます。小さな学校だからこそ、できることを考えてやってみたいと思いました。

ただ、単独の学校で進めるのではなく、中学校区とか、市全体とか、大きな範囲で研修するほうが効果ありなのではないかと思いました。

チーム学校とは分かっていたつもりでしたが、子どもたちのために、教職員、保護者、地域とチームをつくることの大切さを実感しました。なかなか難しいですが、せめて職員室を弱音のはける安全基地にすることを目標に取り組んでいきたいと思いました。全ての子どもにとって楽しい学校をめざして行きたいです。

ありのままを受け入れることの大切さを学びました。支援を要すると思われる子どもは、もしかして分かってもらえないはがゆさ、不安などを多く抱えてしまっているのではないかと思います。学校が息もできない場所というのは衝撃的でした。担任として子どもたちと関わっていると、自分がこうさせたい、できるようにさせないと将来的に大変かもしれないなどこちらの思いだけが優先されすぎて、子どもがどうしたいと思っているのかということをどれだけ考えられていただろうと、自分の関わり方を振り返っていきたくて思いました。

★ 誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト ★

置賜教育事務所では、小・中学校教員の合同チームと指導主事とが協働で授業づくりを行う「誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト」を、今年度も展開しています。今年度は教科担任マイスターの先生方にも全体会に参加していただき、置賜で実現したい「誰一人取り残さない教育」について共有しました。

プロジェクト理念は「**すべての子どもに自ら学びをつくっていきける姿を**」。

「誰一人取り残さない授業づくり研修会」において、今求められている授業の実際を置賜管内に提案していくことをミッションに、現在、実践を積み重ねているところです。今年度は、国語、算数・数学、外国語、社会の4教科で授業を公開します。たくさんの先生方に研修会へご参加いただき、ともに授業について語り合うことができればと思います。

研修会は、それぞれの部会により以下の日程で開催します。お待ちしております！

(申込については別途実施要項を送付しますのでご確認ください。)

| | | |
|---------|-----------|-----------------|
| 国語部会 | 11月20日(水) | (会場：川西町立小松小学校) |
| 算数・数学部会 | 12月5日(木) | (会場：白鷹町立東根小学校) |
| 外国語部会 | 12月2日(月) | (会場：長井市立長井北中学校) |
| 社会部会 | 11月29日(金) | (会場：米沢市立西部小学校) |



誰Pの情報等、研究主任をはじめ今求められる学びに関心のある先生方と共有したい情報を発信する Google クラウド「【置賜】学び合いの場」を作成しております。ぜひ、ご登録ください。



<https://x.gd/rJCoO> クラスコード：5ilqo5b

《 算数・数学 》

研究員：◎星野いづみ 教諭 (白鷹町立東根小学校)
蒲生 圭太 教諭 (長井市立致芳小学校)
市川 健二 教諭 (米沢市立第七中学校)
※◎は授業者です。他教科部会も同じ



自由進度学習の可能性を広げる！

「学力差がある」「算数で活躍できる子は固定化している」「得意な子にも苦手な子にも支援をしたいが手が回らない」。教科研究員の先生方が日々の算数の授業で感じていることです。共感できる部分はありませんか？

プロジェクト理念とこの課題から、昨年度の誰P算数・数学部会がトライした「単元内自由進度学習」の可能性を自分たちも探ってみよう！ということになりました。6月の事前研①では、各自試したことを持ち寄って「苦手な子が自分から動けるようにするには？」「教科書やノートを見返して学ぶ姿が見られた」「一人ひとりをどのように見取り、力をつけていくか？」等、具体的な児童生徒の姿から次の一手を話し合いました。

今年度は、「多様な考えを活かしたい図形の単元で、自由進度学習は可能かどうか？」にチャレンジする予定です。ICTの効果的な活用も含め、持続可能かつ教科の本質に迫る自由進度学習について研究をしています！

《 国 語 》

研究員：◎島貫 梓 教諭（川西町立小松小学校）
竹田 千秋 教諭（高畠町立屋代小学校）
安孫子 直美 教諭（高畠町立高畠中学校）

どの子にも「学ぶ楽しさ」を！

「誰一人取り残さない授業づくり」とは、どういうことなのかを話し合うことから始めました。子ども達の様々な実態を前にして、思い描くようにはなかなか実現できないもどかしさも話題に挙がりましたが、「どの子にも『学ぶことが楽しい！！』と自ら学びに向かってほしい！」という願いを確認し合いました。

全ての子どもが学びに向かうために、求められる教師の役割とはなんだろうか？“観”の転換期を迎え、これまでの授業から大事にすべきことを見出しながら、子どもがよき学び手として自走していけること、さらに、国語科として、言葉を使う良さを子どもが実感していくことを大切にして研究を進めていきます。



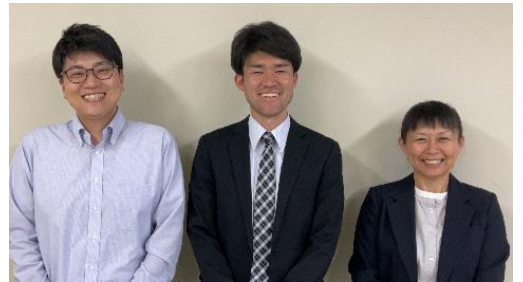
《 社 会 》

研究員：◎東海林 真 教諭（米沢市立西部小学校）
丸山 裕史 教諭（南陽市立赤湯小学校）
安達久美子 教諭（南陽市立赤湯中学校）

主体的に問題解決する姿をめざして

社会科における「誰一人取り残さない授業づくり」について、これまでの実践をもとに考えてみました。「能登半島地震等のニュースや、ゲストティーチャーなどから学びを広げて、自分の問いにつなげる」「自分で調べ獲得した知識をもとに、友達と話し合い、さらに学びを深める」「社会に出たときに生きて働く知識・技能となるように日々の授業から意識する」そして、社会科こそが探究的な学びを習得できる教科だということ。

子どもたちが、身の回りの出来事や地域の伝統文化に興味・関心をもち、問いを自分事として捉え探究的に学んでいくために、教師はどうあるべきか？教科書の内容を踏まえ、各市町の副読本を活かしながらどのように授業ができるのかを、研究しています。持続可能な社会の創り手の育成に向けて、小・中の接続を意識し、教師も探究心を持って挑戦していきます！



《 外国語・英語 》

研究員：井上 幹也 教諭（米沢市立興譲小学校）
戸田 緑 教諭（米沢市立松川小学校）
◎新沼 希美 教諭（長井市立長井北中学校）
安孫子 遥 教諭（高畠町立高畠中学校）

学びをつくる子どもの姿を求めて

「新時代の英語教育推進事業」において、今年度、県の英語教育実践リーダーを務めている4名の先生方とともに「誰一人取り残さない」授業を実現するためには何が必要かについて話し合いました。教室を見渡せば、子ども達の英語力の差は大きい。一度に多くの情報を取り入れる子もいれば、そうでない子もいる。そうしたよくある小・中学校の実情のなかで、すべての子どもがそれぞれに自分の学びをつくるために、教師は何かができるのか試行錯誤しながらプロジェクトを進めていきます。

これからの授業で求められる、子ども主体の学び方と、その実現に向けた教師の働きかけについても、英語科の授業を通して考えていきます。ぜひ授業研究会にもお越しください。

